座談会

大阪の医学文化を語る

日本医史学会関西支部長・皮膚科
（出席者）　中野　操

大阪大学名誉教授・衛生学
藤野恒三郎

大阪府医師会二十五年史編集委員長・内科
杉浦春雄

少彦名神社宮司
別所貫一

日本医家芸術クラブ大阪支部長
大阪市立大学名誉教授・産婦人科
藤森速水

日本医家芸術クラブ大阪支部・副支部長
大阪府内科小児科医会会長・小児科
（司会）　中島蓬太郎

（少彦名神社の張子の虎）

昭和45年8月18日
於宝塚清荒神臨沢温泉ヘルスセンター

明治以前の上方の医学文化

中島　大変暑うございますが、今日の会の進め方について、簡単ではありますが、お話をさせていただくことになりました、中島でございます。

　実は医家芸術クラブ大阪支部として、本誌からの要望がありまして「大阪特集号」を編集するようにとのことで、先にご案内申しましたような主旨で、お集りをいただきましたが、今日このような会を始めるまでには、色々と打合せを申しましたが、そのような事について、藤森支部長よりご説明願いまして、それから話を進めて行きたいと思います。

藤森　ではご指名によりまして、今までの経緯について、簡単に申し上げますが、日本医家芸術クラブでは、毎月「医家芸術」という雑誌を発行しておりまして、手前味噌ではありますが、文化雑誌としては、かなり調子の高い、高尚なもので、既に青森、北海道、京都、群馬、新潟の特集号が発行されておりまして、今度「大阪特集」を協力してやってくれと本部より言って来ました。大阪には色々の特色はありますけれども、既での国に勝る

て、座談会を開く事は段階の意志もあって出来ないので、「大阪の文化」にしぼって話題にしたい。それにはわれわれは医学関係でありますから、その歴史の方面に最も興味の深い、また直接の関わり方をテーマとして取り上げて、特に医学関係、医薬会関係及び薬業関係について、また大阪には古くから医薬に関係のある、道修町の神農さんという関係上のある少彦名神社という神社さんがございますが、そのようなものを中心に、今日第一人者の方々に、ほんとに言いよう、ご多忙中お集りいただきましたが、どこも一段落くらいの段階では行けませんが、必ず素晴らしいましてこれは恐らく素晴らしい内容になると思いますので、よろしくお願いいたします。

中島　今、支部長からの発言の通り、今日の集りの目的は「大阪の文化」という、大きなものを扱って、医学を中心にした文化について、その広がりを振り返って見たり、将来の展望をしてみたりして行きたいと思います。いかがでしょうか、中野先生、医学を中心にして、大阪に育って来た文化というものを、どのようにご覧になっておられますか。

中野　いただいたご案内では「通観」についてという事ですが、大阪の医学文化を語るとすれば、もっと早いところから初めないと、浪華の医学文化を語ることは出来ないと私は思います。と申しますのは、浪速が「なぜ大阪で成功したか」といい、これは大きなテーマでございます。もし浪速が京都や江戸で開業し、漢医を開いた場合を考えますと、私は恐らく成功しなかったと思います。

　なぜ大阪だから成功したか、それは浪速以前の大阪の土壌を振り返して考えないと、問題は解決しない。天保九年に開業して二十年目の十一年の設立で、早くも幕府の前適塾創立によるという、ああいった目覚ましいはやり方は、理解できないと思います。

　一番基本的なことは、江戸の医学書も、京都、大阪を含めた所謂「上方」の医学書の前進であります。これは全く異質のもので、江学者、殊に蘭学をやった人たちは、江戸では一般に将軍の侍医とか、各藩から派遣されて出て来た、藩医や藩主のお抱え医者が多かった。そういう人たちが、新しい学問を勉強して早く藩許へ帰って、藩の侍医になるとか、藩の医学校の教官になるとか、啓蒙的な役目の方の上での便利を受けていたのです。

だから蘭学をやっても、藩学の指導、藩医

の館長や技術に情熱をつくして、西洋の学問を摂取し、理解しようと努力しました。世界の水準から非常におくれていた日本の医学を、早く進歩させるのには、それは当然の要な方法であり手段でもあった。
　ところが京都や大阪の医者は大体が町医者で、アマチュアな立場で解剖にも惹かれ、更に時間的にも余裕があったし、身分や格式にこだわったり、名誉を得る必要もない、何ら必要もなく、知らんことは知らん、不思議なことは不思議として、何物にも捉われない、アラジメな気持ちで、西洋の学問に取組んで行った。
　同時江戸には学問的に非常にすぐれた、本当の意味の蘭学者が沢山いました。
　大阪では本当の意味の蘭学者と言えば、橋本宗吉と緒方洪庵、この二人だけでしょう。
　しかし学問を愛した方にとっても、上方の蘭学者、いや蘭方医たちは決して江戸の人たちに劣っていなかった。むしろ古医方派の合理主義を早くから身につけて来た彼らは、実験を中心として、[illegible]を受け入れて、どこまでも批判的、実験的な態度をとりました。この事は非常に重要なことがらであります。
　それから京都では解剖学について申しますと、江戸時代に各地で行われた人体解剖ですが、江戸では本当の意味の解剖はなかったと言えます。
　江戸の蘭学者は決して自分でメスを執らず、ただ西洋の解剖書と照合して、これは何、その下にあるのが何というだけで満足した。前も杉田玄白が言っているように単なる「腑分」であります。
　ところが上方の医者は最初にやった山脇東洋などは別として、後から出て来た人たちは皆自分でメスを執って解剖に専念しました。自らメスを執ってやるのですから、死者に対する観念が違う。
　杉田玄白の「蘭学事始」を見ますと、明和八年三月四日に小塚原で初めて腑分けした様子について「その日の刑屍は、五十歳ばかりの老婆で、京都生れの女であった」と書いているだけである。
　ところが京都より十七・八年前に、日本で最初の解剖をやった山脇東洋は、その刑死者に対し「お前さんは一回の誤りもなし、しかも刑死に身を捧げて、多年の疑問をとき明してくれた。医学のために役立った。お前の霊魂は実に大で、骨は朽ちても、お前の名はいつまでも朽ちないだろう」と祭文の中に書いて、一月後に慰霊に法要、頭骨の祭りをしてやっている。これが解剖祭の初まりであります。その後、上方の医者は皆これにならって、解剖の度に慰霊祭を行なっているのであります。今も橘南谿、小森桃塢らの祭文が残っています。
　それから橘南谿は「[illegible]」というわが国で初めての解剖図説の本を書いていますが「解剖ということは、医学の修行に必要なことであるが、医術の修行になることでもあり、結論は多くの人の命を救うことにもなるわけであるから、たとえ罪人に対しても十分気をつけるよう心掛けよ」と言っています。
　また橘南谿の記念碑にも「解剖された者は、われわれにとっての恩師であるから、くれぐれも粗末にしてはならない」と書いています。
　そのような気持ちで解剖をやるのと、ただ西洋の本と照し合わせて、内臓の形とか位置とかを学びとるだけとは根本から違う。
　その根本精神の違いの現われが、解剖図巻であります。
　江戸の学者は「腑分」であって、実物の臓器と西洋の解剖図を照し合せるだけで解剖図は残していない。しかし上方の医者は解剖し

た時の図巻を残している。
　初めのころは柿子の円、鍋の心得のある者に描かせたが、後には円山応挙と呉門の吉村蘭洲とか、その弟子の奥村、応挙の子の木下応受、呉春門下の吉村蘭洲の弟子などの名画家を解剖の場に招いて、詳しく写生をさせているのです。それは観察の結果まとまって、解剖学的には何のプラスにもならない解剖図巻ではありますが、そうした解剖図巻が残っておればこそ、解剖は立派なのに、古今の医者たちの意図なり、解剖の経過がわかるわけで、今日においても医学史上、大きな価値があるわけです。そのような図巻を残した、上方の医者たちの努力が決して無駄でなかったことを教えられるのです。
　そして一口に言って、上方の蘭学はヒューマニズムで裏打ちされていると言えましょう。そう言った素地があって、出来た関西の土壌は他とは非常な違いがあると言いたいのです。

適塾と大阪の土壌

中島　中野先生から緒方洪庵と関西の土壌について、結構なお話を伺いましたが、杉浦先生、洪庵について何かご意見なり、他にお考えになっていられると思いますが。

杉浦　先程からのお話を伺っていまして、確かに大阪の蘭学者には、東京その他の蘭学者とは、少し違った気風のある事は事実で、それは古くから培われた、大阪独特の町人的気風の影響であるし、緒方洪庵の影響は無視できないでしょう。
　私は「適塾」から巣立った人をくりひろげて、この人たちがあの動乱のくりひろげられた、明治維新の先駆者となったことを高く評価すると共に、ドイツの医者フーフェランドの医訓を訳して、わが国医療倫理を近代的ヒューマニズムにまで高めた功績は大きいと思います。

中島　杉浦先生は、緒方洪庵の「扶氏医戒之略」のことにふれられましたが、私も同感です。それから中野先生、後半の医学史の話をつづいてお聞かせ下さい。

中野　私がいつも感じるのは、世界の医学史にも残るような偉大な業績をあげた人々が、不思議と関西の人たちだったことです。
　全身麻酔薬を創始したことで名高い華岡青洲は紀州の人です。昔から紀州は京都のお膝の中で、国の上になっていて、生れる時こつくる所と言われてきた風を継承し、[illegible]のスメニーより早く、七官針を考案した賀川玄悦も近江で生まれ、京都で開業していました。それからまた前野や人体の骨格を作り出し、解剖図から模型を作り上げて、骨格を正しく人体の形に組み立てた各務文献も、やはり大阪の人で、「小便の通し道」であると言って、膀胱導尿術を始めた江戸時代の独創的な医者も関西の人で、大阪の開業医でした。
　そういった様々に残るような独創的な仕事をした人は、皆関西の人であった。
　これは大変面白いことで、洪庵はそういう先覚者のことを知っていたかどうかわかりませんが、そういう時代の空気がありました。大阪の町を歩けば地元の話として、読んだことは確かな思いつきだったとは言えないと思います。

中島　この辺で医学史家として見解をいただきたいと思いますが、先生は大阪大学医学部の前身が開かれました頃から、ずっとご研究なさっていられますし、洪庵の研究者でもあり、従来の調査もしていただいていますし、資料も沢山お持ちなので、小野先生の結論のようになると思いますが、「適塾」から

野まで大阪天文学部の開別、ということろまでお聞しといと思いますが。

藤野　小野先生は大阪の星学のことは、よくお聞ってすって、橋方開発とその前後のことは、先生の本が一番あれば、皆わかるように、あれにはチョッと無いようあります。浜尾のことについて、何か追加するような事があれば、どこかに書いて貰いて下さい。

この間、前篇の浜尾の墓門家、宮本天洋博士の話を聞く機会がありましたが、当時の大阪の町の自治会の部落が本当にわかりました。什器の使人はかいして、武士はいても各部の代表者のあってうッコリッが連絡力者か、大阪の文化活動は彼の中心で、いた使人も、文化人を指導して、武士のた前者の使人たこは来ていないようです。

福沢諭吉のお父さんも武士だろうでしたね。ちょうど大阪天部学部所前の住の間のところで、諭吉が生れたんですね。「福沢諭吉書簡集」の巻の諭吉という名が出ては何度の地下室にありましたが、現在は森に変の少ので捨てた。土地な記念碑があります。

その点で、お父さんが中津藩の蔵屋敷の役人であり、自分は学問をしたいと言っていたことを聞いたわけで、お父さんは、そんな人であったかこと、諭吉のような偉い人が生れた思います。

(小野　修三)

一度に、大阪は町人の文化の程度が高かった。武士の多い前に、しかし、それから、東京は、よい天文学者が連続に参加を出したが、聞かれなかったので、自分で研究していんですか、分ってくれ、研究をかっていんですか、分ってくれ、研究をかっていんですか、分ってくれ、

きことです。父も祖父も藩の学者であったようなんですから、それがたとの関係ではなく、人体解剖の記録を皆さん知らせたり、その上原一流の天文学者になって、橋本国臣とか高橋是清などの弟子を育成したんですね。

徳川幕府は武士の世の法系の時には、江戸の天文学者では、どうにもならないことを知

知れませんが、あなたの見だけではないようですね。

中野　それから、これは浜尾に関係があります。一般の市民の中に、哲学や天文の様の科学の道具に惹かれた人のいたことです。西に北浜に店を構えて、河野平大兵衛しもていた。豊岡存代目林屋平右ェ門のおきは、西にあかして、西洋の医薬、平角、医療器具、天文観測器具、その他地球儀、時計、オルゴールなど新品を購入、一ヶ品月、値段、その他を書きつけた帳面が今も残っていますが、それを見ますと、彼はたぶ世界の道具で買い集めたのでなく、この百科事典は天保七年間へ、このスポイト（医療器）は中川元年間へ、元文の器具は寛延間へ、などと遡及を続きへ、それぞれ貴し手えて、判別を考えて研究きやっているのです。

また浜尾の時代ども、機械を始めました時に家を造りてやったり、必要な設計ヒラを作ってやったり、機械を受けた子供たちがなかなか来まらん時に、お菓子を買って与えたり、お酒を与えたりする、大和屋源兵衛のような熱心な商人がいた。このようなパトロン的存在は、実に偉大で、特に大阪に於て非常に重要なものがあったと私は思います。

それから大阪には民間の学者として、宝暦九年に懐徳堂という非常に開放的なものが開設されていて、中井履軒などもここで教鞭したんですが、元禄のところに学問が育ってあって、詳しくは変っていませんが、来たお前の部屋について、武士といえども来から来た者は本当に座るように宿舎、また商人等が多かったので、用事があれば教えても出て行って差支えないか、全く自由な大阪の部屋だが、わかります。

(藤野修三館長)

少し脱線になり過ぎましたが、色々ありました通り、浜尾も徳川の時代の十個、それも半ば終られた、大阪の上層を除まれて、大阪で開業したのであれだけ盛時しい成功をし、おさめたのと思うのです。

中島　藤野先生は、どのようにおお考えになって、この二人が江戸に行って働いたわけです。船長は豆腐のおやじさんです。金長は大阪は文化が高かったと、自由であり、豊かなんです。

天保時期のこの、浜田屋敷のところで、交通関係が発生されたことがあったそうです。

武士の家に生まれ育ったそうです。

そんな、どんどん出たもので、天保時期の機械を作りせ、徳島家やたと思っていましたところが、徳島家の出ったが開いたところでは、言いたかは皆さもしてそれをしたらして、通詞としてはッとした時の駅まで、既のでいまして、長崎人で入を助けた時もあり、蘭語にたけた人であったらしい。

そのあれから伊藤長蔵が出てくるんですが、浜尾が大阪に出てくる前です。

浜尾だって藤の武士の伸であるそうですから、徳島藩にとるまっていたら、徳島藩家を変てたこともしょう。長崎奉行のある時みたいなことをやって出来をしてくれたりがないというので、大阪で開業して、小野先生のお話のように、もう二百日に一度の出来になっています。あなたの生の徳川家の徳川があったかも

中野　陸軍軍医学校は大阪市内の人は十一名となっていますが、大阪で十一名という事はありえないと思います。軍から通ってはいるかもしれませんが、陸軍軍医学校は、陸軍軍医学校の門下生で大阪出身の人はいらっしゃいませんね。

大阪大学医学部の創設

中島　そこで陸軍から少しこちらへ来て、大阪大学医学部の創設とのつながりをいったところを。

藤野　陸軍軍医学校へ呼び出されて、医学所長をしましたが、道修町は残っているんです。道修町の薬屋さん方が支援していて、明治維新を迎えるこの時点で、道修町を維持しています。

中野　薬屋さん方も、維新前後もそうですね。

藤野　道修町は朝子様様と言って、長崎へ留学に出していました。武蔵の元祖、吉春は愛媛ボーイ・クイインに連れられてオランダに渡り、留学生として、ホーレヒト大学に学んだのでした。ところが徳川幕府の崩壊を知ったので、予定を変更して帰国することになって、幕府との約束を守って再びヨーロッパに戻ったボードクイインと一緒に帰って来ました。

(藤野　逸太郎)

新政府による医学校、大阪病院が開設され、愛媛ボーイ・クイインはその教育部長として、勅任官待遇に任命、病院長として迎えられたのです。武蔵の人々、父の門下生が沢山来て、これを助けているのは当然なものです。一番年の若い、日蘭交換教授ンボジラームの弟子であった緒方洪庵先生と一緒に私も参加しましたが、その時、緒方洪庵先生はホーレヒト大学に、何か特別な目的を持ってやって来て、これを助けているのは当然なものです。一番年の若い、日蘭交換教授ンボジラームの弟子であった緒方洪庵先生と一緒に私も参加しましたが、その時、緒方洪庵先生はホーレヒト大学に、何か特別な目的を持ってやって来た。行っていたことは確実なんですが、具体的なものはなかったのか、武蔵のようなものは残っていないのです。明治二年のボードクイインの医学科学の講義録、日蘭記録があるんですが、当時の医学志望者は十六名位の人でしたが、ある時期、医学生が三倍増えたが、ほとんどの人がみんなかなくて、あのような記録講義録が残ったのであります。出版されたのであります。出版年に、ルメレンスの教授、生理、病理、薬物学の講義録は十冊残っております。

この講義録が残っていないなら、大阪医学は空しいのでしょう。

私は医学から、微生物学に進きます。日本の微生物学はルメレンスから始まるのです。また、細菌病理学のことにも病理学もルメレンスに始まるのです。

四名を初めとして医学生の数は、その時の型態の講義録スケッチが残されています。オイゲイケム・ケルビキンスやトラウフイントと病理学的研究の基礎があり、ゲーサーナ・ベントキャキー（細菌）も出ています。従って、講義録がおまかせは、恐らく明治四年にでしょう。それが日本で初めてされたのは明治七年ですね。また、この講義録は新潟医学の立場で書かれた、日本新潟の病理学の本ですとまとまりましょう。それには病理と癌の研究の比べ方の違いがはっきり書いてあります。

中島　明治初年の、大阪を中心にした、医学の出版を来て、欲しいものが多かったのですが、他各博士のような偉い先生が現われたこと、偶然ではないような気がいたします。そのは皆がそれを先生はどうお考えになりますか。

藤野　大阪医学の歴史で、位各先生の功績はたくさんあります。

歴史的は、もう済んでいるんですが、この秋、十月三十一日に創設百年記念の祭典の前で開き行うことです。

北條先生、ルメレンスの時代から話をボーイ・クイインの時代から話を先生でいいまでに、もう一人保大の人物がおられます。吉田銀三という校長です。この人が明治十年に大阪医学校に来てくれたので甲種医学校として残ったわけです。

甲種医学校と言いますと、門出者の試験を受けなくて、学校の卒業証明だけで、医師免許の資格が得られたわけです。

吉田銀三さんが来たのが明治十四年で、十七年ですね。また、この講義録は新潟医学の立場で書かれた、日本新潟の病理学の本ですとまとまりましょう。それには病理と癌の研究の比べ方の違いがはっきり書いてあります。

中島　明治初年の、大阪を中心にした、医学の出版を来て、欲しいものが多かったのですが、他各博士のような偉い先生が現われたこと、偶然ではないような気がいたします。そのは皆がそれを先生はどうお考えになりますか。

藤野　大阪医学の歴史で、位各先生の功績はたくさんあります。

歴史的は、もう済んでいるんですが、この秋、十月三十一日に創設百年記念の祭典の前で開き行うことです。

北條先生、ルメレンスの時代から話をボーイ・クイインの時代から話を先生でいいまでに、もう一人保大の人物がおられます。吉田銀三という校長です。この人が明治十年に大阪医学校に来てくれたので甲種医学校として残ったわけです。

甲種医学校と言いますと、門出者の試験を受けなくて、学校の卒業証明だけで、医師免許の資格が得られたわけです。

吉田銀三さんが来たのが明治十四年で、十七年ですね。また、この講義録は新潟医学の立場で書かれた、日本新潟の病理学の本ですとまとまりましょう。それには病理と癌の研究の比べ方の違いがはっきり書いてあります。

(中島隆太郎氏)

中野　その五條氏の家系は西洋流儀という人で、フランスにも行っていますが、これも長崎の弟子ですね。

藤野　五條氏を対し、二宮敬作でもルゾ・ところが五條氏は本当で基礎の印刷も大阪社や安藤氏に比べたら、お医にもなんとはおお恥ずかしいもので、一番で歩いたらしいです。

この表紙裏面は、ドイツ語で書かれたこれも通訳出身ですから、野崎病院長が教授の教師は早く止めない、日本人はいろいろ、金は本当に使って、教授と思ったのではでしょうか。

中野　吉田銀三先生の出は西宮三宮の医師地に、赤穂に出ておられますが、吉田銀三先生は緒方洪庵先生のもとにおられた時の弟子の名前があります。神田五十郎の何回か医師を大阪市に出張していたことが、何時の時期に記録に出ているんですが、ところが、その安藤さんにお何なかったが、銀三先生の研究の学問にあって、日本の薬記をされたお弟さんがおられまして、全日連絡へご案内願いました。もっと上級の一つ上の進学者、北の国に帰ります。その意には近代の医学部長先生がおられたそうです。

この方はさっきは、宮本学部学院の前の所長中村教授博士先生です。欧大の日本の

も来てもらって色々資料をいただきました。

開三校長が博士号を授与されてから明治十七年の第一回卒業生四名の名簿はありますが、その以前のものは学人名はあるんですが、国家試験を受けなければ何もないんですから、名簿は見当りません。記録もないようです。

中島　それでいろいろ教えを受けられましたのは何年ですか。

藤野　医学校の開学年は明治二十七年です。当時の校長、前田敬蔵先生は藤野さんの恩人で、自費を出して、内科、外科などの教授を招聘されたんですね。医学生徒は来られるまでに病理学の本を書いていらっしゃいますが、当時は富山病院の病理部を務めておられて、帰りますから、小さな研究室を作っているらって、二十何歳かで、もう病理学の本を書いておったんです。

それから細菌学の独逸語に関する本も書いておられましたが、ところがその本が大変ではどこにもないんです。この藤金沢のある お医者さんの世話があって佐多先生の本が、二種ともあったのを手に入れようと努力したのですが、ある医師さんの方へ納められてしまいまして、惜しいことをしました。

明治三十年に佐多先生はドイツへ留学されて三年に帰国、イタリアのナポリで開かれた国際細菌学会では、会長細菌 論説として、「細菌学における黄金伝説について」を講演しています。

これを中心として細菌学的な論文を発表され、医学博士の学位が授与されました。その中にペスト菌に関する研究があります。北里研究所博士よりもずっと前に、世界で分離したものだ、医師に比較研究して、だんだんペスト菌にちがいないと確定しました。ちょうどロ本国内で北里菌の研究が問題になっていた時で、この研究は大きな業績をもったのです。

（故佐多徳太郎）

他金博士は医学教育機関の設置運動で大阪府に大阪府立高等医学校を設置、大正八年に医専が設置された大学令による、第一号の新設大学として、大阪医科大学の設置となったわけです。

他多先生は人格に高潔で、医学者としての識見はあり、体力も、研究に熱心でした。ですが、大阪の貧乏人の医療は大きなものでした。それで大正十三年に大阪府立の病院が開設の運びとなったんです。

中島　いろいろお話をお聞きして、佐多博士は確かに偉かったんですね。

藤野　大学昇格の運動に対抗的な専門式の第十万円の寄附で、住友総理事が来られて、山口英治氏の病院になって山口博士病院が出来て、大阪市民の医学に貢献していました。

昭和九年には山口英治社長の公会堂建設の会館を建て、二十万円を寄付されました。そのお話で一緒をしたのは私かも知れません。

大阪市医師会の発足

中島　いろいろな角度からお話を聞かせていただきましてありがとうございました。

松浦先生は大阪市医師会三十五年誌の編集委員長として、その編集に当っていらっしゃいましたと思いますがいかがでしょう。

松浦　私はまだ学校を出ていないし、会議録を二十年史を少し見て知っているというだけで、最初の大正ものが昭和になるとお聞きませんが、戦後の時代だけは経験してもらいたいのです。

日本医師会がこのようにして新しく結成され、大阪府医師会も新設医師会として発足したかゆ聞きます。「大阪三年八月十五日終戦を迎えて、日本国内が非常な混乱に陥ったことは、皆さんご承知の通りで、医師会としてもあれ以ってれかねばならないと思うことで、戦前からの官選会員であった梅田電吉先生が新任され、中山寿彦先生が新会長として就任されたが、これまでは日本から独立の医師にあったわけですが、歴史的に見て明治三十九年始めて法律として医師会が認められ、同時に医師会設立の年があって、明治四十年十二月に大阪市医師会が出来、大正三年の七月に大阪府医師会が設立して、会長に梅吉三郎先生、副会長に竹村茂、藤井石神を、顧問兼監事に吉田敬一氏、大正三年に発足、大阪市医師会の発足として、日本最古医師会が発足はしたが、これは全国の第一号にされたものではなかった。その後竹村氏も逝去されましてようやく大正十三年に、全国第一の医師会が日本医師会として、発足されたのは医師法成立後、実に二十年のことで、初代会長に北里柴三郎先生が就任されたのですね。

（故梅吉三郎氏）

しかし、このような歴史に残る日本医師会も、地方医師会と連絡協議会で、会員の自覚と、会員一人一人の自覚協力による、信頼感とは親密の事になりますね。

中島　そうでしょうね。

ところで、藤井先生は大阪市医師会に入会されたのは、何かエピソードとかしますか、そのようなことがあったらお聞いていますが、少しお話をしてください。

藤井　そうですね、私は昭和初めの頃大学出て間もない頃、藤井入科の教室にいました。昭和九年に大阪の金野病院の藤井入科長に就任しました時に、福田先生の第出別宮先生から「この金野病院は財界の出資出資式の所産で出来た新天地の病院で、大阪の東大阪の医師会にも入会して、医師会の人々を育て育てようと思うと思う」と言われまして、私達大阪府医師会に入会いたしました。

時代時代にあった先生方は学ゼミナールとお聞いましたが。

中島　それは講習会でしょう、講習会に参ですね。

藤井　そうそうその講習の会合に出席しまして、これが大阪市の医師会の会合に出席しました。

どうかかって行けるのは、この頃から医師会の活動とかの問題のお話でもあると、思っているようなかたです。

中島　そうですか、大阪府医師会に入会されて数年たってわかりましたが、

藤井　そうですね、大阪市医師会に入会の会員ということになりますね。

そこで新構想案、戦後の医師会はどのような構想を語って行ったんですか。

松浦　戦後の歩先については、全部もゆしましたが、その後日日から我が国の政治、経済、教育などあらゆる面に亡兵、改革を要請して来ましたので、何とか新しい医師会にすることについては、日本医師会を初め、全国の医師会の一致と考えておりましたが、どの段と医師会にするかについては、なかなか意見は一致しなかったのです。

我が中央委員にとも、設立委員会、特別法人、個別設立、協同法人、そして会員の医師法律の規自いまでやるというもので、GHQは同、厚生省の指導の問題から反対にあって、第二次改正法案が出て、国会に提出して、会員一人一人の自由意志による任意加入、任意設立、一般法人としての社団法人とする方針に決ったが、昭和二十二年八月二十八日付GHQから、日役員通牒をで再び原案しってしまい、またと中山会長以下の役員が二度と自発的に辞退され、その後の第三次の改正の準備は、各会の協力によって、早く法案を見まして、四年十一月二日新設日本医師会の設立が認可になり、翌年三月の第一回

の代議員会で、表明会長以下新役員を選任しして、ここに初めて新制日本医師会の発足を見ましたが、大阪府医師会はどうでありましたか。

****　とは、当時大阪で最もすぐれた、医師家の一人でありた、金田中先生を中心に有志によって熱心に検討されていて、既に版めて法案を提案して、任意設立、任意加入の方針を選ていて、賛成会員の考えと一致していました。

ここで賛成会員以下、役員の自発的な辞退で、第三次の改正に移し、その準備が進められていきました。

そこで設立委員会もまとまり、これが後に会議となり、次いで設立委員会が設けられたもので、今日の大阪府医師会の定義の基は、実にこの設立委員会にあったのです。

府医師会は一切の準備を整えて、昭和二十二年十月三十一日、大阪の日本橋倶楽部で臨時総会を開いて、新医師会解散の一切の手続をすませまして、翌十一月一日新想大阪府医師会の設立が認可になり、次いで二月九日第七回学術講演会に続く第七回定期総会、月間理事会以下の新役員を決定して大阪府医師会を新しく発足することが出来たのであります。

この一月九日は、わが国の新憲法が施行された記念すべき日であり、代議員会は出席されて、前会長高谷先生先生は次のように述べられた。その要点をお話しますと「今やわが国の新憲法が施行された。国民一人一人の生活権、思想、信教、言論の自由が保障されに至った。一方われわれ医人は国民の生命を守り、健康を保持する為の重大な責任を負託されている。われわれは医学、医術の発達に努力するは勿論、その成果を国民福祉のために、役立てるものでなければならない。今後は公衆衛生の面にも積極的に協力して、われわれ医師の自治自治確立、医権すなわちとしして、新しい医師会員の自覚と自治意識によって、設立されたことは既に意義深いものと、賞讃に堪えないと思っている。これこそ、新医師会の発足であると思う。二十五年経過した今日も、貴様々として人々の会員の意識の中に流れていると信じます。まあ、以上が大阪府医師会誕生の経緯とお考えくださいませ。

神農さんと道修町

中島　どうぞ出席してございました。新医師会の挨拶をあげるまでに、いろいろと苦労

のあったことがよくわかりました。

たびにまは皆さんから色々と、戦後のお話を聞くことが出来まして、ありがとうございました。別所さんからお出でしょう、薬業の神さんとして神農さんと道修町のことについて、お話ださいませんか。

別所　道修町よいいますと日本の薬の本場で、製薬の本場と言われておりまして、やはり昔の薬種仲買、或は問屋の活躍によって地盤が出来、その番頭さんの努力によって近代的な技術をして行ったのと思います。製薬については第二次世界大戦で、わが国の工業国だの基礎が出来、並びて経済力とも大三七年ぐらいから始まったようです。

それまでのお知恵、技術、生産は出れ共ることは出来ないものと思います。近来特に合成化学薬品と共に生薬が見直されつつあることは道修町が昔と生薬によって、その製造業の基礎を築立していったことを、思い合せることが出来ると思います。

藤野　道修町は、どういうところからもつけられたんですか。

別所　足利時代、大阪淀屋橋辺りはこの当り一帯は河底で、淀川の河口となっていて、道修谷と呼ばれていたと聞きますが、昔なられているようですが、江戸時代に道修谷があったからとする説、また北道修という名称が出たっその門前に薬種屋が多かったのと言われていますが、どれが正しいか解らないようでしょう。

それから道修町の薬種仲間の記録は問題の頃から始っていて、特に寛政七年、淀川大性問屋が秘伝の薬あり江戸へ入荷の連中大変病気になり、唐医などの間で一同に出ないと聞いて道修町の高麗が江戸に出れば、唐いて、問屋と交渉した結果は、江戸大阪道修町の薬種商二四軒に、薬種仲間の株の免許を与え、「和薬問屋仲」なるものを設け、問屋の意味から入荷する薬の吟味をする、仲買をもたせたように聞いております。享保七年六月二十一日の記録が残っていますが、「大阪道修町の内、町々の薬種小売商人共、七百軒余薬種株、百四五十軒は共尊信奉仏教信心講、関東に講座所、又設置永は和薬種株問屋に薬種商」とあります。

昔は薬種の吟味はむつかしい仕事で、一歩誤ると人命にかかわる。そこでみんなで相談して伊勢講を組織して、伊勢神宮に参拝、天照大神のご加護を祈り、薬種の吟味に誤りのないようにと念じた。

この宮殿は半分から今年が三百五年に当ります。で、来年では記念事業を今やろうかいうことで、ただいま準備を進めておりますようなわけです。

中島　浜島さんの少彦名神社は、いつからあの道修町にまつられたんですか。

別所　少彦名神社としても、安永九年（一七八〇）十月、京都の五条天神社（五条天神）を勧請いたしまして、以前より船谷に奉祭しておりました、中国の薬祖神の神農氏と共に並べて道修町に鎮座するようになり、薬の神様の徳の力全を期したのが、この神社のはじまりでございます。私たちの先代に、薬祖への信仰と、そのご加護を信仰して、入魂を図られたものと思います。ちょうどやはり二八〇年前に当ります。

藤森　笹子の滝の伝説は有名で、大阪の郷土研究にもなっていますが、どのような調べがございますか。

別所　笹子の滝の伝説は、安永五年社に、三日三夜というものが流行して、人々が大変苦しんだので、道修町の薬種仲間が相談して、薬祖神をお祭りした（『道修町誌』参照）

中村教授は風の関係にありましたので、お宅へ伺ったら、ご逝去後、私の蔵書の松本で、ご年金と関係を出されたような関係がございます。その性格を学者や学問学者とも、ご交際頂いまして、特に今村先生は私が「法曹組織」を研究しました頃、教えていただいたり、推薦されたりしました。

また大阪市立科大学では、熊谷新三郎先生から特々教授先生のことを聞き、いろいろ教えられる所が多かったのです。

藤森　それから大阪の将来についても、よろしくお願いします。

藤森　個人的な関係で、大阪は良く存じているつもりですが、大阪の将来について、私の意見を求められましたが、これは大変むづかしい問題ですね。

しかし大阪の伝統的精神には、今村先生方からお話のありましたように、「道修」の薬学関係の精神が、今日流れているのが感ぜられますよ。

それから、その他も、その後の中種医学校、大阪府立医専学校、大阪府立大学、国立大阪大学、それぞれの時代に、社界からの某大な援助があったことは、実に嬉しいことですって、これこそ「東洋頭脳」の有機的な

中島　十一月二十三日の神農さんのお祭りには、参詣致したいものです、どうもありがとうございました。

藤森先生は大阪市大医学部の創設として、ながく大学にいられたので、大阪医学文化の将来は、どうなるかということを、お話願えませんか。

藤森　私の個人的なことになりますが、実は昭和の初めに京大を出て、昭和五年から大阪の市民病院に勤め、その後大阪市大に移りてから、三十七年間を大阪にいますと、京大出身の方々と時を交わすことなく、基本からも阪大出身と思われています。

私が初めて先生を拝見したのは子供のことで、親戚が先輩を中心で居りましたが、大阪の医学会の会合の時に始めて記念講演をされて、ずいぶん聞いた、当時の大阪の大学出身者中心で、第一を出だすべき、自分発表出席に強い印象を受けたことを覚えています。

京大教授の中で、市岡先生は私と同郷の、吉野県人ですから、時々お会いして、お互いに信頼感を感じあっておりました。吉野の

中村教授は風の関係にありましたので、お宅へ伺ったら、ご逝去後、私の蔵書の松本で、ご年金と関係を出されたような関係がございます。その性格を学者や学問学者とも、ご交際頂いまして、特に今村先生は私が「法曹組織」を研究しました頃、教えていただいたり、推薦されたりしました。

また大阪市立科大学では、熊谷新三郎先生から特々教授先生のことを聞き、いろいろ教えられる所が多かったのです。

藤森　それから大阪の将来についても、よろしくお願いします。

藤森　個人的な関係で、大阪は良く存じているつもりですが、大阪の将来について、私の意見を求められましたが、これは大変むづかしい問題ですね。

しかし大阪の伝統的精神には、今村先生方からお話のありましたように、「道修」の薬学関係の精神が、今日流れているのが感ぜられますよ。

それから、その他も、その後の中種医学校、大阪府立医専学校、大阪府立大学、国立大阪大学、それぞれの時代に、社界からの某大な援助があったことは、実に嬉しいことですって、これこそ「東洋頭脳」の有機的な

ぶ。

藤森　約二千三百くらいでした。

中島　それはそこらでしょうね。

藤森　まあ、あの当時だから、まぼろかたんでしょう、今時でしたら不足ですし、そうはいかないでしょうね。

それでそれは医学だけでなく、科学も一連学部同じ様に、重要的に、行われるところに意味があるとは思うのです。

欧米の大学などは、いろいろの会社も、がっちり手を組んで研究をおこなっておりますね。このような意味から、阪大は世界の中心部にありまして、世界との交流も、円滑に行われるのですから、今後、正しい効果的な、連学協同を行っていけば、今でもようです。改革は必要なんと思います。

中島　今日は時間が足りませんでしたが、大阪の医学文化を語るにふさわしい、その道の第一人者の方々を、ずいぶんお招きすることが出来まして、深々のあい数々のお話を頂き、どうもありがとうございました。

（了）

（速記・編集　日本速記事務所タイプ　大阪支部職員　藤井博光）